



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

碩士學位論文

朝鮮人 金大榮

(조센징 김대영 翻譯論文)

濟州大學校 通譯翻譯大學院

韓日學科

下花 徹

2022年12月

朝鮮人 金大榮

(조센징 김대영 翻譯論文)

指導教授 坂野慎治

下花徹

이 論文을 通譯翻譯學 碩士學位 論文으로 提出함

2022年12月

下花徹의 通譯翻譯學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長_____①

委 員_____①

委 員_____①

濟州大學校 通譯翻譯大學院

2022年12月

역자 서문

나에게는 재일교포인 친구들이 몇 명 있다. 내가 대학생 때 히로시마에서 국어(일본어)를 가르쳤던 남학생 A는 당시 초등학교 5학년이었다. 한국어를 전혀 하지 못했고 이름도 일본식 이름을 쓰고 있었다. 어느 날 A가 ‘특별영주권’에 대해서 이야기한 적이 있다. 그런데 내가 ‘특별영주권’이 뭔지 몰라서 머무적거리고 있었더니 A도 ‘말실수했다’라는 표정으로 다시는 그 이야기를 꺼내지 않았다. 초등학교생이었던 A조차 그것이 민감한 화제라는 것을 눈치챈 것이다.

내가 한국에서 어학 연수를 하고 있을 때 만난 친구 B는 미용사였다. B는 나보다 두 살 어린 남성이고 오사카에서 오랫동안 미용사로 일했던 친구였다. B는 본래 한국 국적이었는데 일본인과 결혼하기 위해서 국적을 일본으로 바꿨다. 결혼했던 여성의 가족들이 한국인에 대한 편견을 갖고 있었기 때문이다. 그러다가 결국 그쪽 가족들과 문제가 생겼을 때 한반도 출신인 B의 어머니는 한국인이라는 이유만으로 심한 욕설을 듣게 되었고 그것을 직접 들은 B는 이혼을 결심했다고 한다. B는 지금 재일교포와 재혼해 일본에서 행복하게 살고 있다.

재일교포 문제는 과거가 아니라 현재의 문제다. 우리가 살고 있는 이 사회에서도 그들에 대한 차별은 여전히 존재한다. 하지만 이 이슈의 시작점인 재일교포 1세의 생애에 대해서 자세히 알고 있는 사람은 많지 않고 또 알려고 하는 사람도 많지 않다. 그들의 생애를 알지 못하는 한 재일교포라는 존재를 이해할 수는 없다. 그런 의미에서 재일교포 1세인 김대영 작가가 쓴 이 자서전은 매우 귀중한 자료가 될 것이다. 이 자서전을 통해 김대영 작가가 일본에 오게 된 경위, 일본에서 경험했던 일들, 일본인과 일본 사회에 대해 가지고 있는 생각들을 자세히 알 수 있다. 재일교포에 관심이 있는 분들이 그들을 이해하는 데에 있어서 도움이 되기를 바란다. 끝으로 이 번역 논문에 아낌없는 열정으로 지도와 조언을 해주신 교수님들과 동기들에게 진심으로 감사의 마음을 전한다.

2022년 11월

시모하나 토오루

국문 초록

본고는 김대영 작가가 쓴 자서전 『조센징 김대영』을 번역한 것이다.

본고에서는 본서의 내용 중 ‘책머리에’, ‘서양세계와의 만남’, ‘문명의 동이 틀 무렵’, ‘빈촌소년의 꿈’, ‘맨손으로 현해탄을 건너다’, ‘요꼬스카의 조선소년’, ‘본격적인 유학생생활’, ‘조센징으로서의 학창시절’, ‘법관이나 돈이냐’, ‘사업가의 짝이 보인다’를 번역하였다.

‘책머리에’에서는 필자가 이 책을 쓴 목적을 설명하며 제일교포의 입장에서 본 한국 사회에 대해서 한국 독자들에게 알리고 싶다는 점을 강조하고 있다.

‘서양세계와의 만남’, ‘문명의 동이 틀 무렵’에서는 작가가 고향에서 살았던 어린 시절을 다루고 있다. 특히 작가의 행동 방식의 기초가 된 기독교 신앙이 자세히 저술되어 있다.

‘빈촌소년의 꿈’에서는 작가가 처음으로 고향을 떠나 만주에 있는 조선인 마을에서 초등학교 교사로서 일했던 기간을 다루고 있다.

‘맨손으로 현해탄을 건너다’는 작가가 어떤 방법으로 일본에 밀항했는지를 쓴 모험담이다. 60년 전의 이야기임에도 불구하고 생생하게 그려져 있어서 작가의 기억력에 놀랄 정도다.

‘요꼬스카의 조선소년’, ‘본격적인 유학생’, ‘조센징으로서의 학창시절’, ‘법관이나 돈이냐’, ‘사업가의 짝이 보인다’에는 작가가 일본 생활에 적응하고 사업가로서 성장해 나가는 모습이 담겨 있다. 제일교포 사회를 이해하는 데에 있어 가장 큰 도움이 될 부분이라고 생각한다.

目次

역자서문

국문초록

はじめに	6
西洋世界との出会い	8
文明の夜明け	12
寒村少年の夢	15
身ひとつで玄界灘を渡る	19
横須賀の朝鮮少年	24
本格的な留学生活	27
朝鮮人としての学生時代	31
裁判官か金か	34
事業家としての芽生え	38
日本語抄録	52

はじめに

弱冠15歳にして海を渡り、日本で50年暮らした。そして、祖国に帰ってから15年。

私の人生の出発点はどこだったのだろうか。その基礎となったものは何だったのだろうか。

無一文で見知らぬ異国の地をさまよいながら、植民地出身者の「恨」^ハ1)を必死で静めていたあの頃がつい昨日のことにように思い出される。私は今、人生の黄昏時を迎えている。

日本統治下の故郷において、大東亜戦争の渦中において、また戦後の混乱期において、私を支えてくれた気概とは何だったのだろうか。

私の実体は朝鮮人、あるいは在日韓国人だった。しかし、50年間の時を日本で過ごした私の精神が全く韓国人のものだと断言することはできないだろう。だからと言って、私は自分が日本人だとも断言できない。それは、韓国人の血を引き「朝鮮人」を差別する日本社会に立ち向かってきた歳月が私の人生にはっきりと存在するためだ。同時に、私は韓国人としての誇りを失ったわけではないが、普通の韓国人とは全く違う日本式の思考法が身につけてもいる。結局、私は両国の国民の目から見れば、韓日どちらにも属することのできない異邦人なのかもしれない。

私は祖国に対する不満と憧憬、日本への愛憎入り混じった感情を抱いている。そんな私に一貫した精神があるとすれば、生涯をかけて守ってきたカトリックへの信仰だろう。あるいはカトリック信仰こそ、私の唯一の実体だと言えるのかもしれない。

私は実業家として文字どおり身ひとつで事業を始め、日本において頂点まで登りつめた。言ってしまうと成功を収めたわけだ。だが、私はここでその成功の秘訣などといったありふれた話をしようというのではない。

日本人からしばしば差別を受けながら、時には彼らを打ち負かす快感を味わった。その逆

1) 訳注：感情的なしこり、痛恨、悲哀、無常観などを意味する韓国語。

に、ふとした瞬間に彼らに感動させられることもあった。常に祖国への愛情を胸に抱きながら、多くの韓国人に何度となく裏切られた。

このような波乱万丈の歳月を送る中で、私には人々に聞いてもらいたい私だけの物語ができあがっていった。それは私個人についての物語ではない。一つの小さな歴史のために、私が見た時代について証言したいことがあるのだ。そのような意味で、この文章のテーマは韓国人と日本人ということになるのかもしれない。あるいは韓日両国を超えた客観的な立場で20世紀の両国の歴史に対して行う、一種の懺悔ざんげのような文章になるのかもしれない。

戦後世代も50歳を過ぎた今、教科書だけで歴史を記憶する世代、韓国人的な固定観念を持って日本を見ている読者、外から見た韓国・韓国人に対するイメージを実感できない読者にとって、私の経験がもの見方を変えるきっかけになればこれ以上の喜びはない。

考えてみると、何事も挑戦すれば成功する人生だった。もちろん誰もがそうであるように私にも挫折は多くあった。だが壁を乗り越えようとする気質が強かったためか、最終的にほとんどの目標を達成した。それと同時にすべてを失う悲しみも味わった。しかし、私個人の成功や失敗がこの物語のポイントではない。挑戦の連続の中で、私は祖国を離れて生きる人々の運命を実感した。そして、他民族の中で長い歳月をかけて得たすべてのものを祖国に帰って失い、その過程で生涯思い焦がれてきた祖国を再発見することとなった。正確に言えば、韓国人の隠れた一面を見ることになった。それを語るがこの本を書いた目的だと言えるだろう。沈黙せず証言することこそ、私が死ぬ前にすべきことだと判断したからである。

2003年春 チャムシル 蚕室の書齋にて

金大榮

西洋世界との出会い

これまでの80年の人生において行動様式の基準となったカトリック的な考え方は、幼い頃の貧しい時代状況において運命的に私の心のうちに形成されたものであった。

キョンサンブクトチルゴクグンウエグァン

慶尚北道漆谷郡倭館の一角であって、約200世帯が住んでいた私の故郷は1920年代当時、日本統治下における韓国の他地域と同様に貧困が日常生活に色濃く染みついており、世の中はまだ文明の夜明け前で、どこを見ても暗い時代だった。

おほ

「年中裸足の妻が暑い日差しを背に落ち穂を拾ったところ」という昔の詩人の表現がそのまま当てはまるほど、女性たちが屋内外を問わず裸足で暮らすのが当然だったあの時代。麦飯に小さなキムチでもあれば幸福を感じられたあの頃の私たち。その生活は今の生活とはかけ離れたものだった。それは朝鮮時代と何ら変わりのない、原始的な衣食住の空間に囲まれた生活だった。

私の家は母方の祖父の時代からカトリックを信仰しており、私も生後3日にして幼児洗礼を受けることとなった。それから今日に至るまで、私は教会においてはカトリック信徒の間で「リノ」¹⁾という洗礼名で呼ばれている。私の家が早い時期にカトリックに入信したいきさつは、実はそれほど大したことではない。貧困という現実から仕方なく受け入れたもので、飢えをしのぐ一つの方法だったと言ってよい。当時植民地だった韓国で活動していた西洋人たちは、最も効果的な宣教法が物で釣ることだとよく知っていた。当時は彼らを野蛮人と罵り西洋の学問を排斥する風潮があった。それでも教会に行けば農地をくれるという彼らの提案は、私の両親にとって拒絶しがたい誘惑だったのだ。

当時、倭館には西洋式の新しい教会が建てられていた。これは早くからカトリックに入信し、先駆的な活動を行っていたチョン・ジェムン先生の功績だった。チョン先生は私の代父²⁾

2) 訳注：キリスト教において、洗礼式に立ち会い、神に対する契約の証人となる役割をする男性。

チョン・ヘンボンさんの父親で、幼少期の私に大きな影響を与えた人物でもある。

私は1日3銭くれるという条件が気に入り、厳格な規律もいとわずミサの手伝いをするようになった。もちろん誰にでもやらせるというのではなく、その仕事を得るためには難解なラテン語のテストに合格しなければならなかった。その頃は、すべてのミサがラテン語で行われていた時代だった。賢いと評判だった私は、ラテン語の祈祷文を暗唱した。私はそれを今でもひとつ残らず記憶している。

家から20分の距離で共同墓地を通り過ぎた所にある教会を往復したあの頃は、告解の「*mea culpa mea culpa mea maxima culpa* (私のあやまちである。私のあやまちである。私の大いなるあやまちである)」という文句のように、非常に鮮明に私の頭に刻まれている。

後に神父となったチョン・ハゴン (フィロリアーノ)、イ・ギルジュン (パウロ) と共に行ったミサの手伝いは、就学前の7、8歳の子どもにとって決して楽な仕事ではなかった。

端正な祭服の管理、ミサの時間厳守、子どもには長過ぎるミサの緊張感、失敗した時の神父様の厳しい叱責など、簡単な仕事ではなかった。だが、普通学校³⁾の学費が50銭だった時代に、その報酬はなかなかの収入源だったと言える。

最近では韓国からも宣教団が途上国に派遣されて活動しているから、当時の西洋人たちの布教法は納得しやすいと思う。例えばアフリカの原住民のように何も知らず、原始状態に近い外国人たちにキリスト教を布教する場合、彼らに生活上の恩恵を与えなければ成功は難しいだろう。

その頃、私たちもはっきりと西洋の神父たちから未開人扱いを受けた。ロベルト・イー神父だけでなく、青い目の老神父・カン神父も同じだったと記憶している。幼い私を感じられるほど、彼らの目には一種の人種差別的な気配が漂っていた。もちろん、私たちが5千年の歴

3) 訳注：1906年から1938年まで朝鮮半島に置かれた初等教育機関。現在の小学校に相当する。

史を持つ文化的民族であり、アフリカの土人とは種からして違う白衣の朝鮮両班⁴⁾だという自負心はあったと思う。だが、その頃の私たちの姿はあまりにみすぼらしく、日常生活には迷信の影が色濃く反映されていた時代だったから、パリ外国宣教会のフランス人神父からすればそれも仕方のないことだったのである。

いつだったか、教会の横にある畑に私たちの見慣れない野菜が植えられていた。

それが今は非常に一般的な野菜となったトマトだということを、その時は知るすべもなかった私とチョン・フィロリアーノ、イ・パウロは、それが食べたくて堪らなくなった。誰もが腹を空かせていた時代であり、間食はおろか三食の麦飯を食べることも難しい時代だった。

「お前、あれが何か知ってるか」

「何、あれのことか。あれは神父様が新しく植えた『トマト』だろ」

「『トマト』？ あれ食べてみようぜ」

「何言ってるんだ、こいつ。神父様に見つかったら棒で殴られるぞ」

「大丈夫。何個か取ったからって、誰にも俺らの仕業とは分からねえよ」

チョン・ハゴンとイ・ギルジュンは食べたいけれども唾を飲み込むだけで、なかなか勇気が出ないようだった。私はまさか大丈夫だろうと思いつつ、熟れてもいないトマトを十数個もいで2人と分けて食べた。私たちはまだ熟れていない青っぽいトマトをあつという間に食べてしまった。その結果、未熟で青いそのトマトを食べたという理由で、ロベルト神父から2時間にわたる信仰告白を2週間続けるという贖罪しよくざいをするよう言い渡された。

普段から私たちが過ちを犯したら胸ぐらをつかんで投げ飛ばすほど厳しかった神父様の命令に背くことは、絶対にできなかった。今考えると、その罰に幼い私が一人で耐えたことに感心するほどだ。神父様も何の不平も言わずに課題をすべてこなした私に感心したのか、贖罪をしている時に褒めてもらったことを覚えている。

4) 訳注：李氏朝鮮時代の特権的な官僚階級、身分。

1年生か2年生になった頃のことだ。近所にチャン・デボンという同年代の子供がいたのだが、高齢の母親と二人でとても貧しい暮らしをしていた。よほど生活が苦しかったのか、デボンはご飯をもらいに回るのが日課だった。それもどの家にも行くのではなく、朝、私が登校する頃に必ず我が家の門の前でひさごを持って立っているのだった。

デボンは私と同じ教会に通っており、既に洗礼を受けて「パウロ」という洗礼名もあったため、他の家よりも私の家が訪ねやすかったのかもしれない。

「デボン、何でそこに立ってるんだ？ 中に入れよ」

私はデボンを部屋に招き入れて朝ご飯を食べさせてやり、母に彼のことを頼んでから学校へ行った。そして共同墓地を越えて学校へ行く途中、デボンを哀れに思うのだった。私は両親の下で麦飯でも食べることができる。それなのに、デボンのような幼い子供が老母のために食べ物をもらって回っているということが、幼い私にも不憫で健気に思われた。

デボンに対する私の同情は、カトリック的な雰囲気の中で芽生えたものだと言えるだろう。共同墓地を越えて学校へ行くためには、必ず教会の前を通らなければならなかった。そして教会の中の聖母像を見ると、デボンの事を思い出して何となく足が止まった。私は祈りを捧げた。

「聖母様、チャン・パウロをお守りください。あの幼いパウロが貧困から抜け出せるようお助けください」

ところが、ある日を境にデボンが姿を見せなくなった。気になったので、教会で会った時に事情を聞いてみると、自分のせいで私が学校に遅刻しそうだから、学校に行った後で家に来るようにしたというのだった。

「不憫な奴だ」。その話を聞いて、私も人知れず目頭を熱くした。後日、年を取ってからチャン・パウロの行方を探したが、誰も知らなかった。朝鮮戦争の時に死んだのか、どこかへ引っ越していったのか……。年齢を考えれば既にこの世を去っている可能性が高い。今でも教会へ通っていた幼い頃を思うと、ひさごを持って立っていたチャン・デボンの姿が目には浮かび、彼のために祈りを捧げたことを思い出す。

このように私のカトリック信仰生活は始まった。貧しい時代の産物として、生存のための選択

としてのカトリックが、私の人生の精神的土台となるとは誰も想像していなかっただろう。もしそれがなかったら、無数の分かれ道において私は今と違う道を選択していただろう。もしかしたら過った道に迷い込んでいたかもしれない。どちらにしろ今とは全く別の人間になっていただろう。カトリックこそ私の人生において欠かすことのできない糧だったと言える。

文明の夜明け

両親を早く亡くした父は、姉の家で育ったようだ。祖父母が早く亡くなったため、父は幼少時代に非常に苦しい生活を経験したものと思われる。3代続いての一人息子だったから、親戚もいなかったはずだ。母の方も一人娘だったから、祖父としては誠実で勤勉な父をいわば入り婿として受け入れたのだろう。

幼くして両親を失った父は、姉家族の家で育った。そのせいもあり、父はきちんと教育を受けられなかった。彼は無学な人間だった。でも祖父は父が優秀な人物で、光山金氏クワンサン キムという両班ヤンバンの家系だということで、一人娘と結婚させてもいいと判断したようだ。母は漢方医をしていた祖父の下で漢文教育を受けており、孤児同然の父に比べればなかなかの知識人だった。

私たちが倭館に住むようになった背景も、さかのぼってみれば祖父の漢方医としての仕事のためだった。当時、大邱近郊の農村で漢方医をしていた祖父は、その一帯しんじゅつでは鍼術の腕で有名だったという。その頃、倭館にはイ・スボクという祖父の友人がいたのだが、この人の家は富農だった。

このイ・スボクの兄がハンセン病を患っていたのだが、祖父の治療を受けて完治した。このことで祖父の漢方医としての名声は一気に上がり、富農だったイ・スボクの父親はその謝礼として祖父に田んぼ10マジギ⁵⁾と畑5マジギをくれたという。これを機に祖父は倭館へ移り住み、自身は漢方医としての仕事を続け、婿である父に農業を営ませたそうだ。

このようにして、私は倭館で生まれることとなった。だから、私は祖父の下で育ったと言える。3代続いて一人息子だった父の子どもとして、女の子4人の後に私が生まれたため、家族の

5) 訳注：田畑の面積の単位。地方によって異なるが、田は150～300坪、畑は100坪程度。

私への愛情は当然ながら非常に大きかった。もっとも、私の出生に関するおとぎ話のような物語を聞けば、読者はシャーマニズムと混ざり合った韓国のキリスト教の一面を見て苦笑するだろう。このようなことは現在においても、ほとんどが巫俗信仰⁶⁾のかたちで新教・旧教を問わず韓国のキリスト教に残っており、しばしば指摘されている問題でもある。

その内容とは次のようなものだ。私が生まれるまで、家の大人たちは非常な努力をしたという。母は朔望⁷⁾になれば夜中の12時頃に齋戒沐浴し、カッ⁸⁾と道袍⁹⁾という男装の出で立ちで村の井戸へ行って祈りを捧げた。それも単なる祈祷ではなく、井戸を左回りに3周してから井戸の水に自身の顔を映し「ほう、そいつは真に賢いの」という言葉を呪文のように繰り返すというものだった。その後、母は私を妊娠し、翌年の4月初日に私が生まれた。そのため、両親や家の大人たちは母の祈祷のおかげで私が生まれたと強く信じたようだ。カトリックを信仰する私の両親がこうだったのだから、村の人々については言うまでもない。

私の両親は教会で西洋の文物に接しており、開けた考えを持っていた。それでも、家族の愛を独り占めしていた私が、当時は一つの村から一人、二人通うかどうかだった倭館普通学校^{ソダン}に入学したことは決して尋常な事ではなかった。裕福な家の子供たちも書堂^{せんじ}で「千字文^{もん}」などを学んでいた時代だったから、裕福でない私の家の状況からしても、強い決意がなければ不可能なことだっただろう。

出生届の提出が3年遅れたため、私はそのぶん遅れて入学した。しかし、私は就学前に教会で小学校の課程をほとんどマスターしていたため、新たに勉強することは特になかった。その頃、倭館教会の地下では、私の友達だったソ・ソンマン君のお母さんが「文盲退治班」¹¹⁾を担任していた。いわば「新女性」¹²⁾だった彼女は、初期のエリート女性として一種

6) 訳注：朝鮮半島のシャーマニズム。

7) 訳注：陰暦の1日と15日

8) 訳注：昔、成年男子が頭にかぶった冠。

9) 訳注：男子が上着の上に羽織った礼服。

10) 訳注：漢文などを教えた私塾。

11) 訳注：学生にハングルを教えて文盲をなくすことを目的とした教室。

の啓蒙運動を行っていた。

ラテン語の暗唱で実力を証明していた私はそこで、イギリス ハングル・日本語・日本史など初等課程で扱う主要科目を楽にこなした。だから、普通学校では授業と関係なく李光洙¹³⁾の小説などに読みふけり家では家事を手伝うという生活の中でも、無事に卒業することができた。

当時は大人たちが子どもに「勉強しろ」などと言わない時代だった。もともと学生も少ない頃で競争もなかったため、子どもたちは男女関係なく家事を手伝うのが当たり前だったのである。

夜になると灯とうがい蓋に火を灯していたあの頃、火をつけて本でも読みさえすれば必ず「何で灯をつけるんだ、油がもったいない」と叱られるような時代だったから、勉強をしたくても存分にすることはできなかった。早朝・深夜の補習や学習塾のある昨今の学生たちの環境から見れば、本当に大昔の話である。

そのような環境でも私が最終的に大学まで卒業できたことを考えると、もちろん学業のための知能は必要だったろうが、それに加えて学業への熱意が人より強かったのではないかと思う。それは恐らく、勉強以外に貧しさから抜け出す道がないと私が判断していたからだろう。教会と普通学校での経験は、勉強だけが貧しい環境から抜け出す唯一の道だということを悟らせてくれたという点において、私にとっては非常に大きな意味があったと言える。

幼少期から骨格が大きく性格が気が強かった。私には、いわゆる「ボス気質」があったようだ。男の子なら誰でも10歳にもならない時から牛に食べさせる秣まぐさを刈ったり薪集めたきぎをしていた時代に、私はそういった作業を自分ではほとんどやらなかった。常に私についてくる子どもたち、いわば「子分」がおり、私が指示すれば不平も言わず私の分までやってくれた。だから、私はその間に李光洙の『愛』をはじめとする小説に読みふけることができた。そのような気の強さは、後に見知らぬ異国の地において独力で成功するために欠かせない要素だったと言える。

12) 訳注：19世紀後半から20世紀前半にかけて、現代的な教育を受けた女性を指した言葉。

13) 訳注：1892年～1950年。朝鮮の文学者、思想家。「朝鮮近代文学の祖」とも言われる。

寒村少年の夢

3年遅れて入学した関係で、普通学校を卒業した年の春、私は15歳になっていた。どこにも私を待っている場所はなかった。もしそのまま倭館に留まっていたら、面^{ミヨシ}14)の書記でもやりながら故郷で農業を営んでいただろう。あるいは技術者となって、若いうちから家計を支えていたかもしれない。

普通学校卒業まで1週間ぐらいとなったある日、父が私を大邱へ連れて行った。私は汽車に乗って旅行するのがうれしくて、機嫌よく父についていった。だが、父は私をある家具屋に入れて技術者にする計画だったらしい。大邱には伯母の息子にあたるパク・ナムソクという従兄が住んでいたのだが、父は私を彼に預けて帰ってしまった。

その従兄は私をある家具屋に連れて行った。恐らくその主人に私を受け入れてくれるようお願いしたのに違いない。その時になってようやく、私も大人たちの考えに気づいたのだった。苦しい時代だったから、中学校に通わせることもできないなら、早めに木工技術でも身につけさせてお金を稼がせようとしたわけだ。

しかし、私は図らずも半日足らずでその家具屋を出ることとなった。その店には私より背が低い年下と見られる少年が先に入り雑用をしていた。こいつがあまりに先輩面して威張り散らすものだから、私としては癪^{しゃく}に障った。それでも、店の主人が先輩として立てなければならぬと言うので我慢しようとした。だが、こいつが汚い仕事を全部私に丸投げするのだ。そればかりか自分の服の洗濯まで私にさせようとするので、私もそれ以上我慢することができなかった。

故郷で大事な息子として育てられ、ほとんどの仕事を子分たちにさせていた私が、そんながきんちよの服の洗濯をすることなどできなかった。私はそいつを叩きのめして、その家から出てしまった。おとなしく言うことを聞けない私の性格は、家具職人になるには激し過ぎたようだ。ともあれ大邱の家具屋におけるこの事件は、私がある決断をするきっかけとなったと言える。

14) 韓国の地方行政単位の一つ。

この時、私は運命の分かれ道に立っていた。私は常に外へ出て行こうとする進取的な性格で、故郷の後進的な環境はあまりに息苦しかった。そのような意味で私の日本渡航は偶然の成り行きだったとは言えない。それは私の性格上、ほとんど必然的な選択だと言っていいだろう。

また私は教会に通いながら西洋の文物に接しており、外の世界に憧れる少年っぽい希望を抱いていた。そのため、大したこともないと思っていた小学校の同級生たちが大邱の慶北中学キョンブクや日本の上級学校に通って得意になっている様子は、私を刺激するに十分だった。

両親に対して頑固に自分の行くべき道を主張したあの薄暗く寒い冬の夜のことは、今でもありありと目に浮かぶ。

「デヨン、お前どうしても家を出て行くと言うのか」

「父さん！」

「おう、言ってみろ」

「父さんは家がずっと貧乏でもいいの？」

「貧乏が嫌だからって、日本に行けばどうにかなるのか。日本に行ったらいい方法でも見つかると言うのか」

「勉強するよ。貧乏から抜け出すには勉強しないとダメだ。そして、勉強したいのなら日本に行かないとダメだ」

「デヨン！」

「何ですか、母さん」

「そうは言っても、どうやって日本まで行くの。お金がないと行けないでしょ？」

「俺が言いたいのもそこなんだ。日本は隣村みたいに近い所じゃないんだぞ。陸続きなら歩いて行くこともできるが、船に乗らなきゃならんだろう。旅費を出してやるにも金はないし……」

父の力ない声が今も聞こえるようだ。

もちろん、私も家計の状況からして簡単に進学できるとは期待していなかった。日本に行きたいという願いは実現する兆しが全く見えなかったのである。

そのようなある日、私の活路を開いてくれる事件が起こった。満州から帰って来たイ・ハソンという人の話を聞き、そこに朝鮮人村があるということを知ったのだ。

「とりあえず外に出てみようじゃないか！ こんな狭苦しい村にどんな希望がある言うんだ？」

私は外の世界をのぞき、自分の人生を変えようと思っていた。

かんとう おうせい

間島省汪清県春香村サンパリン区¹⁵⁾。

満州の都市・汪清で汽車を降り、さらに180里¹⁶⁾歩いた場所にその村はあった。そこは住民の大部分が朝鮮の全羅道出身者で、彼らが生活苦から満州に来て新たな生活の場として切り開いたいわば開拓村だった。朝鮮ではすでに日本による収奪がひどくなり、小作人は非常に厳しい生活を強いられていたが、満州では開墾すればただけ自分の土地になると言っている状況だった。

村人の増加にしたがい、村には子どもたちが通う学校が設立された。だが、子どもたちを教える教師を見つけることは容易ではなかった。当時は交通や通信の状況が現在とは全く違い、満州も朝鮮から見れば遠い異国の地のように感じられるほどだった。また、月給は良かったのだが、盗賊が出没するなど治安上の問題があった。このような状況だったから、きちんと資格を持った朝鮮人教師を雇うのは難しかった。そのようなわけで、小学校を出ただけの私ではあったが、彼らの要請を快諾してしばらくのあいだ開拓民部落で教師生活を送ることとなった。

最初は少し緊張もしたが、年齢のわりに体つきもがっしりしていた私は、思ったよりも順調に教師生活を送ることができた。当時、私の年齢は15歳だったのだが、学生の中には私より年上の子供もいた。なかには18歳の学生までいて、最初は少し当惑した。

適当にやり過ごすことはできない雰囲気だった。しかし、故郷にいた頃から子どもの扱いに慣れてきた私としては、その程度のことは満州に来る前から想定していた。私は普通学校時代に

15) 訳注：現在の中華人民共和国吉林省延辺朝鮮族自治州汪清県。

16) 訳注：韓国の1里は訳392メートルで、日本の1里の10分の1に当たる。

教わった日本人教師のやり方を真似することにした。少し年上だからと言って指示に従わない学生には容赦なく罰を科し、宿題の点検も徹底的に行い、適当にごまかそうとする子どもは運動場で走らせて気合いを入れた。自分が年下だとか教師の資格を持っていないということを意識させてはうまくいかないと思い、むしろ必要以上に生徒たちに厳しくした。この日本人教師のやり方はすばらしい効果を見せた。恐らく、その当時はそのような軍国主義的教育法が高く評価される環境だったのだろう。着任して1カ月足らずで、生徒たちは一糸乱れず私の指示に従うようになった。

しかし一方で私には不安もあった。それでも、次第に保護者からは高い評価を受けるようになった。新しく来た若い教師がしっかり教えてくれると、予想以上の好評を得たのである。一度学生たちを連れて川辺に行き、集団で垢すりをさせたことがあった。その頃の満州、中でも開拓民部落の環境はひどいものだった。学生の多くは手足を洗わないのか、手や足が垢で真っ黒だった。

私は学生一人ひとりに石を拾わせて川辺で手足の垢すりをさせた。しばらくすると、垢がすっかり取れて本来の皮膚の色が戻ってきた。学生もそれが不思議だったらしい。その話を聞いた保護者たちも当然喜んだ。こうして、私は心配していたわりにすんなりと教師生活に順応することができた。

しかし、そこでの生活も私を引き留めることはできなかった。私の身分としては月給もかなり高く、子どもたちを指導することも特別難しくない上にやりがいもある仕事だったが、その村が故郷と同じぐらい息苦しい環境だったためである。そこで教師をするということはまったく発展性のない仕事であり、息苦しさに耐えられない私の体質にもまるで合わなかったため、私は4カ月で満州での教師生活をやめてしまった。

ところが私が教師の仕事を辞めてその地を離れることが分かると、村の住民たちはとても落胆したらしい。旅立ちの日に荷物をまとめて家を出たところ、村の人々が私を囲んで道を阻んだ。彼らは15歳の青二才を村に欠かすことのできない教師だと固く信じていたのだ。

「先生、このまま行かせるわけにはいきません」

「本当にすみません」

「だめです。そうはさせません。この子たちを放って行ってしまうんですか」

生徒もほとんどが来ていた。最初に私に反抗した年上の子どもたちも、いつの間に情が移ったのか、私を引き留めてきた。

「許してください。私も自分の夢を育てたいんです。若いうちに広い世界に出て、もっと勉強もして、見聞も広げたいんです」

「それでもダメです。こんなに仲良くなっておきながら、行ってしまふなんて薄情だ。これから誰が子どもたちを教えるというんですか。先生、お若いのに冷たすぎるんじゃないですか」

「すみません。ここで学生たちを指導することもやりがいのある仕事ではありますが、私はもっと勉強して他の大きな仕事をしたいんです。国の柱を育てると思って許してください」

実はいざその地を去る段になると、私もなかなか足が進まなくなっていた。とても短い期間であり年齢差もほとんどなかったが、師弟間の絆はしっかりと生まれていたようだった。女子生徒は もちろん年上の男子生徒たちまで泣き出すと、私も教師としての体面を忘れてもらい泣きしてしまった。私も彼らとずっと一緒にいたかった。学生と住民たちが涙で私の道を阻むと、私の心も一瞬揺らいだ。しかし、私は冷静に心を落ち着かせた。より大きなことをするために目の前の悲しみを受け入れようと心の中で誓い、私はサンパリン区を去った。

その後、私は生徒たちのことを考えて眠れないことがよくあった。一種の罪悪感があったのだろう。解放¹⁷⁾後も満州の学生たちのことが真っ先に思い浮かび、朝鮮戦争が勃発した時も彼らの安否が最も気づかわれた。恐らく今はほとんど生きていないだろう。満州での数カ月という短い時間を、そして彼らの顔の一つひとつを、私は今でも忘れることができない。

身ひとつで玄界灘を渡る

満州で数カ月過ごしている間に夏は終わっていた。その頃、小学校の同級生だったパク・ジョンドンが夏休みで家に帰っていた。彼は長野鉄道学校の学生だった。しかし噂によると自

17) 訳注：1945年8月15日の日本統治からの解放を意味する。

転車屋を営んでいた彼の父親は、経済的に余裕がないから彼に学校を辞めて家で自転車修理でも手伝ってほしいと考えているとのことだった。私は玄界灘を渡るにあたって多くの人々の助けを借りたが、その中でもまず最初に紹介しなければならないのがこのパク・ジョンドンである。

当時、日本に行くためには正式の手続きを踏んで関釜連絡船の渡航券^{かんぷ}を発行してもらわなくてはならなかった。日本での入学や就職とは何の関係もない私にとって、それは当然不可能なことであった。そこで「ジョンドンの学生証さえあれば」という考えがふと脳裏に浮かんだ。日本の学校の学生証はそれ自体が渡航券だったのである。パク・ジョンドンが父親の意向に従って学校を辞めようとしていることに気づいた私は、翌日彼を呼びだした。

「ジョンドン、お前新学期が始まったらまた学校に通うのか」

「辞めようか思ってるんだ。親父の言うとおりで家で自転車のパンクでも直してる方がいいんじゃないか思ってさ」

学校に戻る気持ちはあまりない様子だった。

「長野鉄道学校って、制服も学生証もあるんだろ？」

「そりゃそうだけど、どうして？」

「その制服と学生証、俺にちょっと貸してくれよ」

「そんなもの何で要るんだい？」

「実は……」

私はジョンドンに計画を正直に打ち明け、制服と学生証を貸してもらった。

私は彼の制服を着用し、写真館へ行って学生証サイズの写真を撮った。それから彼の写真が貼ってある長野鉄道学校の学生証に私の写真を貼った。写真に押された校長の印も刻印機ではなく朱肉で押しただけのものだった。これはマッチのとピンセットでそれらしく作ることができた。

意志があれば道は開けるということだろうか。

母親のもとを離れて広い草原を走ろうともがくライオンの子どものように、狭い谷間の溪流から

海に向かって泳いでいくサケのように、広い世界へ向かう私の執念を止められるものはないように思えた。パク・ジョンドン……彼はもうこの世にいないが、私の運命の転換点において決定的な役割をした人物だということは間違いない。

2人目の人物は横須賀中学に通っていたソ・ソンマン先輩という人物で、彼の母親は私にとって「文盲退治班」で教わった恩師だったため、お互いよく知っている間柄だった。彼は年は私より一つ下だったが、年齢通りに学校に通っていたので学年は私より2つ上だった。

私は初めての日本渡航で彼と同行することにした。もちろん事実は打ち明けず、長野鉄道学校の正規の学生であるかのように話しておいた。ソ・ソンマンは臆病というか、度胸が足りない男だったので、事実を打ち明けたら同行を断られることは明らかだったからだ。

しかし、故郷を後にして釜山行きの汽車に乗ると、私の気分は言葉では言い表せないほどだった。懐には父のお金が入っていた。家計の事情を考えるとやってはいけないことだったが、遠い将来のことを考えれば仕方のないことだと自分を慰めた。もちろん全額ではなく半分だけ、父に申しわけない気持ちを抑えて失敬したのである。

車窓に映る故郷の風景が少しずつ後ろに遠ざかる中で、自分が大日本帝国の警察と対峙しなければならぬのだという思いが急に押し寄せてきた。それはこれから私が一人で世の荒波に耐えていかなければならぬことを意味していた。

ソ・ソンマンに最後まで嘘をつきとおすことはできなかった。パク・ジョンドンのふりをしている間に、警察の前でどんなひどい目にあうか分からなかったからだ。汽車が発車すると、私はいつ彼に事実を打ち明けようか思案に暮れた。汽車が三浪津サムナンジンに到着すると、駅には警察が列車検問のため待機していた。私は便所で急いでパク・ジョンドンの制服に着替え、ソ・ソンマンに哀願した。

「ソンマン、俺の状況を知っておいてほしいんだ。実は俺、偽学生なんだ」

「何、偽だと？」

「どういふことかと言うと……」

私は日本に行くためにはパク・ジョンドンの学生証を持ってパク・ジョンドンのふりをするしかない理由を彼に説明した。

「お前、気が狂ったのか。俺をわざと困らせようってのか」

「こうするしかなかったんだ。今回だけ目をつむってくれないか。俺はどうしても日本に行かないといけないんだ」

「馬鹿なこと言いなよ。あちこちで警察が待ち構えてるんだぞ。捕まったらどうなるか知らないのか。捕まって死ぬほど辛い目をに遭って、身を亡ぼすことになるかもしれないんだぞ……」

彼は頑として聞かなかった。検問に引っかかって自分も巻き添えになることをひどく恐れていることは明らかだった。どれだけ懇願しても聞き入れてくれず、しまいには横の車両に行ってしまった。

「弱虫め！」

私がそんな文句を言っているうちに、制服を着た警察官たちが一斉に汽車に入ってきた。その時の検問がどれほどものものしく、また日本の警察官たちの目つきがどれだけ陰しかったことか。私は覚悟を決めて腹にぐっと力を入れた。

しかし、あらかじめ細かく準備していたのである程度は自信があった。長野鉄道学校の校長の名前や担任の名前、下宿の位置、大家の名前、親しい友達の名前など、徹底した下準備をしておいたおかげで、いざ警察官にあれこれ聞かれても淀みなく答えることができた。学生証を見せると、警察官もそれ以上とやかく言わなかった。長野の事情に暗いのが少し変ではあったが、入学して何カ月もたっていないからだろうと彼らも納得したのである。ようやく第一関門突破！ 私はびくびくした表情で再び現れたソ・ソンマンに対し、肩をいからせてみせつつ釜山へと向かった。

こん ぎょうまる

しかし、釜山港に到着して下関へ渡る金剛丸に乗る時、そこにいた警察官たちは三浪津のそれとは目つきから違っていた。彼らは乗船する人々の列の横で、少しでも不審な者がいれば

驚くほど正確に捕まえていった。そして、私もその例外ではなかった。ソ・ソンマンは通しておいて、私だけを列の外に呼び出すのである。そしていくつか質問した後で、夜10時に彼の部屋に来るようにと言うのだ。

「これはヤバいんじゃないか」と、私はやきもきしながらあれこれ頭を働かせた。8時出航だったから、10時と言えはすぐだった。何か妙案を考えなければならなかった。その時、我々の横の席には身なりのみすぼらしい母娘が乗っていたのだが、出航していくらもたたない10時頃に船がひどく揺れると、母親である年かきの女性が船に酔いはじめた。彼女は顔がひどく真っ青になり、しまいには嘔吐した。何とかしてあげようと彼女を介抱していた私は、吐いた物をたっぷりかぶってしまった。しまった！ 鉄道学校の学生としての体面が丸つぶれである。パク・ジョンドンの制服は汚物でどろどろになってしまった。吐瀉物ふを処理したり制服を水で拭いたり、あわただしくしているうちに時間は12時になっていた。

「どうしようかな。今訪ねて行ったら『遅い』とひどく怒られるに決まってるし、それがきっかけで俺の正体がバレるんじゃないか」

私の焦りは尋常ではなかった。当時、金剛丸の船底には警察の留置場もあり、怪しまれた人が取り調べ中に死ぬことも日常茶飯事だった。場合によってはその場で処刑されることがあるという噂もあり、私は並々ならぬ危機感を感じていた。

私はすべてのことを神様に委ね、一晩中祈りを捧げた。

「我々を憐れんでくださる神よ！ リノの命をお助けください。この幼いリノをお救いください。何の力もなく、頼るあてもありません。懸命に勉強して貧しさに打ち勝ち、成功することを夢見ているこの子羊の真心を健気に思ってやってください。この難関を突破できるよう勇気をください。リノの運命をすべてあなたに委ねます」

私はお祈りしながら一晩中びくびくしていたが、明け方になってこれ以上先延ばしにできなくなり、警察官に言われたとおり彼の部屋を訪れた。ノックするとすぐに寝起きのような声音で「何の用だ」という言葉が返ってきた。私が身分を明かすと、一晩中酒を飲んでうつらうつらしていたのか、それとも遅くまで賭け事をしてから熟睡していたのか、苛立ちの混ざった声で「やっと来た

のか」と怒るのだった。警察官は明らかに私が訪ねてきたことを、そしてそのせいで睡眠を妨害されたことを煩わしがっていた。彼は「いいから帰れ」と言った。

「学生証を持ってきたんですが」

後で分かったことだが、実は学生証はもはや私にとって必要のないものだった。下船する時は検問がなく、また日本に行くことが目的だったから、長野鉄道学校のパク・ジョンドンという学生証は既に渡航券としての役割を終えていたのである。あるいは警察官の言葉を無視して、部屋を訪ねなくてもよかったのかもしれない。

少したって警察官はドアを開けて学生証を投げてよこすと、再びドアをボタンと閉めた。それで終わりだった。第二関門突破！

私を汚物で洗礼したあの老婦人は、実は救世主だったのかもしれない。

横須賀の朝鮮少年

日本に到着した私は横須賀にあるソ・ソンマンの部屋で彼と同居することにした。ソ・ソンマンは先にも述べたようにこせこせした部分があり、一緒に生活するにあたってそのケチっぷりは並大抵のものではなかった。ご飯を炊いて食べたり共同の支出があったりする度に、どれほど出し惜しみしたことがか。そんな彼のせせこましい性格は豪放な私とは合わなかった。

彼は「^{はた}秦運送業」というところでアルバイトをしていたのだが、そこは今でいう引っ越しセンターであった。そこで、私も彼について行き一緒に働くようになった。しかし引っ越しの荷物を運ぶのは、今でも同じだが、非常にきつい仕事である。ソ・ソンマンは私より体が小さいにも関わらず、経験のおかげかそれなりに耐えていた。だが、私は体が大きいただけで労働というものきちんとしたことがなかった。故郷で農業を手伝う時も子分らにやらせ、3代目の一人息子でしかも遅くできた子どもだった私はきちんと働いたことがなかったので、同年代の子供たちと比べて肉体労働にはまるで自信がなかった。

私は数日で運送業の仕事を辞めてしまった。ソ・ソンマンはこの程度の根気もなしにどうやって客地での生活に耐えていくのかと不満そうだったが、私にとってはそれ以上やりたい仕事ではなかった。数日後、私は^{くりはま}久里浜^{はんば}というところに行ってみた。実はそこで朝鮮人が「飯場」を営んでいるという噂を聞いたからだった。そこへ行ってみると、母親と息子が建設現場を運営しており、強面の息子が荒々しい人夫たちを働かせ、年老いた母親が人夫たちに食事の世話をしていた。

「おばあさん、こんにちは」

「あら、朝鮮から来た学生さんかい」

「そうです。ここでの生活はいかがですか」

「そうね。少しきつくはあるけど食べていくぐらいには稼げるわよ。ところで学生さんはいつ日本に来たの？ 私は朝鮮人に会うとすごくうれしくてね」

飯場の老婦人は朝鮮から来た若い学生を健気に思ったのか、あれこれ質問をしながら実の孫と話しているような明るい表情を見せた。

「おばあさん、お腹がすいてるんですが、ご飯をちょっと食べさせていただけませんか」

「あら、私ったら。お腹がすいたでしょ。ちょっと待ってね。すぐに出してあげる」

飯場だけに料理はたくさん準備してあった。私はおばあさんが出してくれた料理を見て目を疑ったほどだ。人夫たちに食べさせるというから予想はしていたが、つやつやと白く輝く米を見たのは最後がいつだったか思い出せないぐらい久しぶりのことだった。それ以外にも焼き魚などおいしいおかずがあり、私は「腹をこわす」というおばあさんの心配をよそにご飯を2杯たいらげた。

そのおばあさんはどうやら私にお願いしたいことがあるようだった。ご飯を食べて少し話をした後、おばあさんはやはり故郷から来た手紙を読んでくれと言いだした。その飯場は母子を含めて全員が文盲だったので、字を読める人が1人もいなかったのである。「そんなのお安い御

用だよ。満州じゃ先生やってっただ」。。

私は稚拙な文体の手紙を「ご機嫌いかがですか」とか「歳月と共に想いが募ります」といった高尚な言葉に適度に置き換えながら明朗に読みきかせた。おばあさんは久しぶりに故郷の便りを聞いたためか、私が手紙を読んでいる間ずっと涙を流していた。

故郷にいても生活が苦しかったあの時代、何ひとつ教育を受けていない朝鮮人が日本で生きていくことが簡単なはずはなかった。しかも、交通や通信が発達していなかった時だから、故郷の便りを頻繁に知ることもできなかった。そんななか送られてきた手紙も、字が読めないから内容が分からず、どれほどもどかしかっただろう。

だから、おばあさんとしては私が非常にありがたい存在だったのである。さらに私がそれらしい言葉で返事も書いてやると、おばあさんはご飯やおかずなど食べ物をたくさん包んでくれ「また来てくれ」と何度も頼むのだった。

その日、ご飯の当番だった私がおばあさんが包んでくれた料理を差し出すと、ソ・ソンマンは「信じられない」という顔をしていた。それも当然で、日本に来て何日もたっていない男が久里浜まで行って人と知り合い、彼が見たこともない大ごちそうを持って帰ってきたのだから、ソ・ソンマンが驚くのも無理はなかった。その後、久里浜飯場の常連客となった私を、おばあさんはたいそう気に入ってくれた。最近の言葉で言えば私の「熱烈なファン」になったわけである。

そのようなある日、おばあさんに飯場の帳簿係をしてくれないかと頼まれた。やってくれればこれから学費や食事は面倒見てやるというのである。確かに飯場を運営するにあたって、字を読めないおばあさんは非常な不便を感じていたはずだった。日当やら食事代の計算やら客のつけやら、記録しなければならないことがたくさんあった。また、私としてもきつい肉体労働よりはるかに楽な仕事であり、断る理由はなかった。

私は帳簿係をしながら、毎日帳簿に分かりやすくその日その日の収支内訳を記録した。それによって飯場の運営がはるかに組織的に体系化されたことは言うまでもない。この時から、私のおかげでソ・ソンマンもおいしい料理と米の飯を食べられるようになった。食生活の水準が大幅に向上すると、ソ・ソンマンは小言を言わなくなり、日本生活において先輩面することもなくなった。

飯場の母子が私に親切にしてくれたのにはもう一つ理由があった。その家にはスニというおばあさんの孫娘がいたのだが、スニは私と同年代の娘だった。ふくよかでかわいらしい顔をしていた。スニも私を家族のように親切に接してくれた。目が合うと顔を赤らめる純真な娘さんだった。

しかし、その一家が私を花婿候補として目をつけていることに、私は後になって気がついた。「下宿を引きはらって家に来い」と言うので一緒に住んでいたのだが、私の食事や洗濯物までスニにやらせるのを見て、私もハッとしたのだった。もちろん、私はそのような素振りを見せず一生懸命に帳簿係の仕事をした。私も若かったから女性に興味がないわけではなかったが、勉強するために故郷を離れて日本へ来た以上、女にうつつをぬかしている暇はなかった。その後、私が専門学校に入ってその家を出てから縁は切れたが、久里浜飯場で過ごした3年間は私にとって平穏な日々であり、今もあの頃を思い出すと飯場の情景の向こうにスニの純朴な笑顔が浮かぶ。

本格的な留学生活

久里浜飯場の帳簿付けをしながら住む場所も飯場に移し、幸い食事の心配は解決した。だが、問題は私が不法滞在者だということだった。この問題を解決できなければ何もできなかった。私は飯場の帳簿付けなどをするために日本へ来たわけではないのだ。まず中学校か専門学校に進学するのが急務だったが、パク・ジョンドンの偽学生証でできることは何もなかった。そんな時、天が私を助けようとしてくれたのか、文字通りとてもありがたい人に会える幸運が訪れた。当時朝鮮人の団体で協和会というのがあったのだが、これは今風に言えば韓国人会のようなものだった。その会長に会ったところ、彼は非常に顔の広い人で、大きな影響力も持っていた。

この人が私を気に入ってくれたらしい。もともと社交的で人づきあいの上手だった私は「好印象だ」とよく言われていた。もとより「ほう、そいつは真に賢いの」という祈祷の末に生まれた私である。私が日本に来ることになった事情を説明し、困難な境遇にある私を助けてほしいと訴えると、彼はすぐに助けてやるから何も心配するなと言ってくれた。

協和会会長の手助けのおかげで、私はようやく正規の留学生になる準備に着手できた。実家にはすでに連絡が行っており、私が何の相談もなしに日本渡航を決めたことが不満だった父は、一方ではそんな息子に感心したのか戸籍謄本や学校関係の書類など必要なものを送ってくれた。私はソ・ソンマンが通う横須賀中学校に入学することになった。ソ・ソンマンは夜間部ちゆうこう やしよで、昼は仕事をして夜は勉強する「昼耕夜誦」の生活だったが、飯場の帳簿付けをしていた私は昼間部に入ることができた。学校での勉強は思ったよりも難しくなかった。当時の私の目標は横須賀中学校ではなかった。当時、私はひそかに横浜の専門学校を狙っていた。中学校を卒業する頃だったか、私の計画を聞いたソ・ソンマンは当然のことながら「それは難しい」と表情を曇らせた。

「横浜専門学校？ 何言ってるんだ。お前みたいな奴が……」

仮に何とか入学条件を満たすことができたとしても、入学試験に合格するのは不可能だというのが彼の意見だった。ソ・ソンマンは常に「難しい」「困難だ」という風に型にはまった考え方しかせず、私はその困難なことを達成するために、まずはやってみるタイプだった。だから、彼と私は本当に対照的な性格だった。それでもソ・ソンマンと共に暮らしたことを思うと、我々には深い縁があったとしか言いようがない。

ソ・ソンマンの悲観的な見通しとは違い、私は「それ見ろ」と言わんばかりに簡単に入学試験に合格した。ついにかっこいい角帽をかぶって正規の留学生となったのだ。灯蓋で光を灯す朝鮮の片田舎で「文盲退治班」を経て普通学校を卒業したお上りさんの私が、都会である日本の子どもたちと競い合って堂々合格したのである。世間に対する自信がついたのも当然だった。私に対するソ・ソンマンの目つきはほとんど尊敬に満ちたものになったと言っても過言ではない。

横浜専門学校の学生になり、ようやく留学生になったという気がした。どう考えてみても自分で自分が大したものだと思った。専門学校に入るまで、本当に多くの紆余曲折があった。大邱の家具屋に就職していたらどうなっていただろう。また、満州で教師を続けていたらどう変わっていただろう。パク・ジョンドンがいなかったら？ 私は角帽をかぶった自身の姿を鏡で見

ながら、分岐点に来るたびに下した決断の一つひとつを頭の中で思い出してみた。

「そうだ、よくやった。キム・デヨン、お前はもう立派な専門学校の学生なんだ。倭館の片田舎で腐るわけにはいかなかったじゃないか。満州を離れたのもいい選択だった。大邱の学校に通っている奴らも羨ましくないぞ。切磋琢磨^{せつさたくま}しよう。これからは気を引き締めて勉強するんだ。今までやってこれたんだ。どんなことでもできるさ！」

この頃、日本留学の夢を実現して自信に溢れていた私に、悪くすればその夢が吹き飛んでしまうかもしれないという危機があった。パク・ジョンドンの偽学生証事件が完全に解決されていなかったためだ。解放前年のことだったか、私は休みに実家へ帰っていたのだが、友人と金烏山^{クモサン}へ行って特高警察に捕まったのだ。

当時は警察が学生を見つければ、ただでは見逃さないのが普通の時代だった。学生が珍しかったこともあるが、不穏な思想を持ったり伝えたりする階層は識字層であったため、無学な一般大衆と違って学生ならば年齢を問わずとりあえず疑いの目を向けたのである。特に倭館のような片田舎にはほとんどいない角帽の専門学生に会ったのだから、事の正否を問わず言いがかりをつけてくるのは当然だった。

私を検問した警察官はよりによって朝鮮人だった。当時は朝鮮人警察官が日本人警察官よりも悪辣^{あくらつ}だと言われていたのである。いくつか質問をした後、彼は私を警察署に連行した。

「おいお前、正直に言え。どこに行って誰と会って来た？」

彼は頭ごなしに私をどなりつけた。

「誰にも会ってませんよ。さっき友達と金烏山の滝に行ってきたんです」

「嘘つくな。滝に行って誰かと会っただろ？」

「会ってません。友達と滝で水浴びしてきただけですよ」

「お前、態度が悪いな。どこの学校だ？」

「横浜専門学校です」

私は学生証も持っており、何の問題もないれっきとした横浜専門学校の学生だったから引け目を感じていなかった。「しまった、偽学生証！」。まさにその時、パク・ジョンドンパク・ジョンドンの顔が頭をよぎり「まずい」と感じた。そして思ったとおり、警察官はすぐに核心を突いてきた。

「渡航券はあったのか」

「渡航券なしにどうやって船に乗るって言うんですか」

私は悪い奴に引っかかったと思ったが、後になって事実が明るみに出たとしても、とりあえず言い張っておこうとふてぶてしく考えていた。経緯がどうあれ、私は正規の専門学校の学生だったのだから。しかし事実関係を少し追及すれば、偽学生証で玄界灘を渡ったということはすぐに分かるはずだった。すべての記録が残っているはずであり、警察にも渡航券を受け取る時に必要な身元照会などの痕跡こんせきがあるはずだった。私が不安な気持ちで戦々恐々としていたまさにその時、偶然にも幸運が訪れた。私を取り調べていた警察官が他の事で少し席を外した時、家の近所に住んでいた人が警察署に入ってきて私に気づいたのだ。

彼は倭館で毎日新聞の支局長をしていたチョ・ヤクシルという人物で、私とは直接的に親しい関係ではなかったが、教会に通う信者だったので家族同士よく知っていた。彼が私を助けてくれた。

「お前が何でここにいるんだ？」

「金烏山に遊びに行ってきたら捕まったんです」

「何？ 何も悪いことしてないのか」

「何もしてません。ただ滝に行って水浴びして来ただけなのに、『誰と会ったんだ』だの『何をやったんだ』だのと罪をこじつけようとするんです。僕が『何もしてない』と言っても全然聞いてくれないんです」

おそらく彼がマスコミ業界にいたためかもしれないが、警察も彼の言うことを無視できなかったようだ。チョ・ヤクシルさんのおかげで私は警察署を抜け出すことができた。危うく留学も何もかもふいになるところだった。

「リノ！ 天がお前の味方についてくれているぞ」

これで私はすっかりしなかった不法渡航の問題からも解放された。当時、倭館では私がパク・ジョンドンパク・ジョンドンの偽学生証で渡航したということは多くの人が知っていた。チョ・ヤクシルチョ・ヤクシルさんもその事実を知っていた。警察署から一緒に出た時に彼が「お前は本当に大した奴だ。偽学生証で玄界灘を渡ったんだからなあ」と言った時、私は倭館で噂になっていたのだと知った。

後で分かったことだが、噂が広まったのはパク・ジョンドンパク・ジョンドンが口外したせいだった。ソ・ソンマンソ・ソンマンも自分の家族にその話をしていたようだが、そちらは問題になるはずがなかった。しかし、私の知らない間に問題がこじれるところだったらしい。ソ・ソンマンソ・ソンマンの姉のソ・マリアソ・マリアさんがチャン家という家へ嫁いでいたのだが、その家のチャン巡査チャン巡査という人もその事実を知ってソ・マリアソ・マリアさんに聞いてきたというのだ。チャン巡査チャン巡査はそれをよく行く自転車屋でパク・ジョンドンパク・ジョンドンに聞いたようだった。しかし、ソ・マリアソ・マリアさんはもちろん私をかばってくれた。

「キム・デヨンキム・デヨンっていうソンマンソンマンの友達を知ってますか」

「どうしてですか。リノリノが何か悪いことしたんですか」

「いや、彼がパク・ジョンドンパク・ジョンドンの学生証を偽造して日本に行ったみたいなんだが、知りませんでしたか？」

「そんな昔のことをほじくり返すんですか。学校にちゃんと通ってるんだから、そっとしてやってください」

家族に関連することなので、チャン巡査チャン巡査もそれを問題視するつもりはなかったらしい。故郷の人々はもちろんチャン巡査チャン巡査も不問に付したため、この問題で私が悩まされることはなかった。

パク・ジョンドンパク・ジョンドンをはじめとするたくさんのお会い……。

それは「縁」の一言では説明できないほど必然的な連続性を帯びていた。人間社会の出来事において、人との出会いはすべて縁があつてのことであろうが、横須賀中学と横浜専門学校を経て東京の中央大学法学部に進学するまで、私にはそのような出会いの一つひとつが運命的なものに感じられた。

朝鮮人としての学生時代

横浜専門学校に通うなかで生活は変わり、苦しい日々が続いた。再び空腹の時代が始まったのである。空腹はそれまでも当たり前だったが、当時はそれこそしょっちゅう食事を抜いていた。いつだったかまったく元気が出ず一日中寝転がっていたところ、近くに住んでいた老婆が気の毒に思ったのか食べる物を持ってきてくれた。それは麺だったのだが、私もソ・ソンマンも麺を食べたことはあっても作ったことはなかった。

麺はゆでて食べるものだと聞いたことがあったので、我々は醤油を入れてうどんをグツグツ煮た。しばらく煮た後で食べようとする、それは期待していたものとはまったく違っていた。冷水でゆすぐという過程を省いていたのだから、それも当然である。それでも我々はおかゆのようになったそれをおいしくいただいた。

ひもじさよりさらに耐えがたかったのは、日本人学生たちの差別だった。何か悪いことをしたり失敗して指摘されるなら問題ないのだが、朝鮮人だという理由ひとつで未開人扱いされるのには閉口した。私は故郷にいた幼い頃から負けず嫌いの性格であり、腕力には自信があった。また、子どもたちを扱うすべも身につけていたから、日本の子どもたちにやられてばかりはいられなかった。

このヤマを乗り越えなければ、ずっと日本人に抑えつけられて生きていくことになるのは自明だった。私はふだん私をいじめていた男をターゲットにして、朝鮮人の強さを見せつけてやろうと決心した。

「おい、橋本。出てこい！」

「出てこいだと？ この朝鮮人がとち狂ったか。お前、今俺に出てこいって言ったのか」

「そうだ。出てこいと言った」

彼はあきれた顔をしていた。

「お前、俺の口からニンニクの臭いがするとからかってたよな？ ほら、かいでみろ。かいでみろよ！ においがするかしないか、かいでみろ！」

「こいつ死にたいのか」

私は素早く彼の胸ぐらをつかみ、外に引きずり出した。「今、機先を制しておかなければ、どうにもならない」。子どもの世界で相手の気をくじいて主導権を握るすべは、倭館にいた時から身につけていた。橋本という男は運が悪かった。彼は最初から私の相手ではなかったのだ。

私はそれまでのうっ憤が溜まっていたから、血まみれになるまで彼を殴りつけた。

結局、私は教務室に呼び出された。

「キム・デヨン、お前橋本とケンカしたそうだな？」

「はい」

「何であいつを頭から血が出るまで殴ったんだ？」

「僕を『朝鮮人だ』とからかったんです」

「朝鮮人を朝鮮人と呼ぶのがどうして悪いんだ？」

「……」

「橋本に謝れ」

「僕はまちがったことをしていません」

「何だと？ お前は罪もない学生に暴行したんだぞ。それでもまちがってないと言うのか？ 性悪の朝鮮人が」

「本当に僕は何も悪くありません。橋本が僕を馬鹿にするから……」

「うるさい。謝罪するか一晩中教務室で正座するか、お前の好きにしろ」

その日、私は夜12時近くまで正座した。私がまちがいを犯したとはまったく思っていなかったからだ。結局、その先生は私に根負けした。

「キム・デヨン、お前は本当にそこらの奴らとは違うな。いいだろう。お前の根気を買ってやる。もういいから帰れ」

この日から、日本人学生たちの態度は目に見えて変わった。「あの朝鮮人はヤバいから手を出さない方がいい」という噂が広まったのかもしれない。ともあれ、この事件がきっかけで私は日本人学生を相手にする際の自信が生まれた。勉強も最初はついていくのが難しかったが、この事件の後で「日本の奴らも大した事ないな」と思い始めると追いつくことができた。

私が日本人の前で韓国人として堂々とした態度を取れる強さも、この頃から形成されたものと言える。日本で50年暮らしても韓国語を話す時に日本風のアクセントがまったく出ないこと

や、多くの僑胞^{キョポ}¹⁸⁾が日本風の名前を表記する時代に私だけが「金大榮」という韓国の名前を大きく表札に掲げて生きてきたことも、この頃に生まれた私の民族的性向に起因するものだと言える。

裁判官か金か

私が日本の中央大学法学部に入学したのは、小さい頃からの夢を実現するためだった。裁判官になって故郷に錦を飾ることが私の元々の目標だった。今も韓国では大きく変わっていないが、裁判官になって家門の名声を上げて多くの人に称賛されることが、当時日本に植民地支配されていた韓国人にとって最も栄誉あることだと考えられていた。そのように中央大学に入学した後、私は解放を迎えることになった。

日本の敗戦と祖国の解放。すさまじい変化の渦の中で私自身の個人的な人生もまた、その新たな流れにのみこまれていった。敗戦後の日本も、韓国と同じく食べていくことが非常に困難な時期だった。まさにその頃、当面の生活を立てていくために始めたスイカ売りの仕事が私の人生を変えるきっかけになるとは、その当時は予想さえできなかった。

リヤカーにスイカを積んで店舗もなしにスイカ売りを始めた時は、どうにか食いぶちだけでも稼ごうというつもりだった。しかし誰もが腹を空かせていた時代だったからか、スイカ売りは想像以上に繁盛した。最近の言葉で言えばバカ売れしたのであり、お金を数える時間もないほどだった。商売の手腕は生まれつきのものではないかと思う。その当時、スイカを売ったからと言って誰でも繁盛するというわけではなかった。

平塚のスイカ畑でできる限り安くスイカを買いつけ、人通りの多い場所で売って利益を上げるまでの過程一つひとつに経営のノウハウが求められた。当時、明治大学に通っていたチャン君は私と同時期に大磯でスイカ売りを始めたが、ヤクザの嫌がらせに耐えられずやめてしまった。私もヤクザの嫌がらせを考慮には入れていた。

18) 在日コリアンを指す韓国語。

私は平塚駅の駅長を訪ねて留学生の厳しい事情を説明し、商売できるよう手助けしてほしいとお願いした。当時は朝鮮人に同情心を持つ日本人もいなくはない雰囲気だったからか、駅長は駅前広場でスイカを売ることを許可してくれた。それから商売を始めていくらもたないうちに2、3人のヤクザが肩を揺らしながら現れ「何で勝手にここで商売してるんだ」といちゃもんをつけてきた。

「許可はもらったのか」

「許可？ 駅長の許可をもらってやってんだ」

「駅長の許可ってか。好き勝手しやがって」

彼らは手当たり次第スイカを割っていった。

あんたん

私は当時、暗澹とした時代における私の境遇や故郷の家族への心配のために心がささくれ立っており、ヤケクソになっていた。

「俺が商売しようがしまいがお前らに何の関係がある？ そうさ、俺は朝鮮人だ。股引ひとつで玄界灘を渡って来て、ここで勉強してるんだ。やるんならやろうじゃないか」

私は頭に血が上って何も見えないような状態だった。私は棒をつかんで一人だけを狙って殴りつけた。遠慮する必要はなかった。なぜならヤクザたちは通報することができないことをよく知っていたからだ。その時、親分と見られる男が包丁を抜いて前に出てきた。

「刺すなら刺せ」。私は上衣をはだけて腹を突き出しながら叫んだ。

「お前ら、よりによって苦学している学生をいじめるのか。ちょっと商売して生計を立てようとしてる学生一人も見逃してくれないのか」

親分は私を不憫に思ったのか、それとも自分たちがけち臭いと感じたのか、すぐに包丁をしまった。

「分かった。学生ということで大目に見てやる。お前たち、もう行こう。朝鮮人までいじめることあねえだろう」

そのようにして、彼らはあっさりと私を見逃してくれた。私が感謝の意味を込めてスイカを1玉ずつ持たせてやると、喜んでもらって行った。それから彼らに悩まされることはなかった。

ヤクザの問題が解決すると、次の課題はスイカを売る技術だった。

平塚駅前広場で商売をする時、スイカ1玉を400円から600円の間でまちまちに受け取っていたのだが、それには客を目ざとく区別するセンスが必要だった。

買う人、買わない人、時間に余裕がある人、すぐ列車に乗ろうとしている人、子どもにせがまれている人、食べたいけど高いと思っている人、値段が良ければ10玉でも買いそうな人など、客の状況に合わせて値段を調整する要領が求められた。

ある時は一日中忙しく売りさばき、精算してみると利益が2万円を超える日もあった。スイカ売りが大繁盛しているという話を聞いたソ・ソンマンが「そのうち俺たちもその金で日本の土地でも買えるんじゃないか」と話すほどだった。

私はスイカを売ったお金で故郷にいる病身の長姉に薬を買って送った。姉は私が故郷を離れる時、家計に余裕がないにもかかわらず、船賃にあてろとお金を渡してくれた。その姉が病に伏しているという知らせを聞いていたのである。1回だけではなく、手に入る薬はできる限り求めてその都度送った。そんな時、家から母の手紙が届いた。

「デヨン、見慣れぬ日本の地でどんなに苦勞をしているだろう。送ってくれた薬はちゃんと受け取ったよ。お前の姉さんはあの薬が効いて少し快方に向かっていたんだよ。でも、お金がないばかりにお前の姉さんは……。

病院で治療を受けさせるために百方手を尽くしたんだけど、お前の姉さんを受け入れてくれるところはなかった。お前も知っているとおりの、うちの苦しい経済事情じゃ入院費を払うことができなかったんだ。

角帽をかぶったお前の写真を見せて『うちの息子が日本で大学に通っているから、お金を稼いできたら返します。どうか助けてやってください』と頼み込んだこともあったけど、通じなかった。そんな風に苦しんだあげく、お前の姉さんは逝ってしまった。

デヨン、もう姉さんはこの世を去ってしまった。だから、あの世で幸せに暮らせるよう祈ってほしい。全部母さんと父さんが不甲斐ないせいだ。お前の姉さんは命が尽きる最期の瞬間にもお前に会いたがっていたよ。

どうかお前はお金をたくさん稼いで、長く生きられなかった姉さんの無念を晴らしてほしい。客地では体に気をつけるんだよ。母より」

母の手紙を読んだ私は、悲しみで一晩中眠れなかった。私は家にいる他の人たちの目も気にせず、ワンワンと泣きながら夜道に飛び出した。夜空の星々のあいだに姉の顔が見えるような気がした。小さな頃から母親のように私を負ぶって育ててくれた姉だった。その夜、私は空を見上げて誓った。

「金を稼ごう。どうやっても金を稼ぐんだ。それだけが姉ちゃんの無念を晴らす道だ」

スイカを売ってある程度商売のやり方が分かってきた私は、姉の死を通じて新たな目標が何かはっきりと悟った。

裁判官としての未来は祖国が解放されたため意味を失っていた。もしなれるとしても日本の裁判官であり、それは当初の私の思いとはかけ離れていたためだ。当時、私のように裁判官を目標に高等試験を準備していたキム君は、日本に帰化までした末に合格した。

そのようにして検事になったが、韓国人が日本で検事として仕事をするには限界があった。いくら帰化したと言っても、結局のところ彼は韓国人だったからだ。彼は皆が嫌がる麻薬関係の事件ばかり担当させられ、昇進も後回しにされ続けた。最終的に辞表を出し、弁護士としての活動を始めたが、韓国人弁護士に依頼する日本人がいるはずもなく、状況は変わらなかった。お金のない韓国人の弁護ばかりしていたためか、法律家としての彼の活動は意欲もなく、本人の希望とは違ってしがたいものとなった。結果的に、あの時の私の選択は正しかったと言えるだろう。

日本で韓国人がお金を稼ぐには二つの方法があった。飲み屋とパチンコ屋がそれだ。そのようにして、私はその時ブームを巻き起こしていたパチンコ産業に注目することとなった。

事業家としての芽生え

新たな目標を定めてお金を工面していた私にいい仕事が舞い込んできた。その頃は燃料の貴重な時代で木を売る仕事もうかったのだが、木を手に入れられそうな場所を見つけたのである。当時、立教大学を卒業して寺で僧侶をしていた日本人の友達がいたのだが、彼の父親は逗子の西運寺さいうんじという寺で住職をしていた。私は友達ともだちの紹介でこの父親に会ったことがあり、面識を持っていた。この住職は毎日必ずお酒を飲む人で、特に朝鮮の焼酎を好んだ。彼の酒好きが私に絶好の機会をもたらしてくれるとは、誰が予想できただろう。

「君が朝鮮人だから話すんだが、私の願いをひとつ聞いてくれないかね」

「はい、何でしょうか。私ができることなら何なりとお話してください」

「うん、実は私は朝鮮の焼酎を飲みたいんだが、ちょっと手に入れることはできるかね。どこかに朝鮮人が焼酎を作っている所があるという噂を聞いたんだが」

「わかりました。私が探してみよう」

接近する口実を模索していた私にとって、彼の提案はありがたく感じられたほどだった。朝鮮人が焼酎を作っている場所、それは川崎の桜本のことだった。川崎には製鉄所に徴用されて来た人も多くおり、もともと朝鮮人が多く住んでいる場所だったので、朝鮮人の集団居住地域と言っても過言ではなかった。俗に言う朝鮮部落であったこの場所には朝鮮市場もあり、そこに行けば焼酎も簡単に買い求めることができた。

食べていくのが大変だった時代、朝鮮人たちはこっそり焼酎を造り、その売り上げで生計を立てていた。私は朝鮮市場で焼酎を2、3升買って住職に渡した。焼酎の値段など安いものだった。そのようなことを数回繰り返し、私が買い求めた焼酎の効果でそろそろ話が通じだろろうという頃を見計らって、私は本音を打ち明けた。

「焼酎はお口に合いますか」

「うん。ぴりっとした味が最高だよ。君には本当に手間をかけたな」

「とんでもないです。私も住職様にお願いがあるのですが、聞いていただけますか」

「何だ。言ってみなさい」

西雲寺の周囲は鬱蒼^{うっそう}とした森が取り囲んでおり、薪に使う枯れ木は溢れるほどだった。その枯れ木こそ私の目的だった。私は住職に切っても差つかえない枯れ木の伐採を許可してほしいと頼んだ。すでに朝鮮焼酎なしではいられなくなっていた住職は、枯れ木を持っていきたいという願いを小さなことと考えたのか、許可してくれた。

住職の許可は得たが、問題はそこからだった。力仕事をしたことのない私とその巨大な木々を一つひとつノコギリで切ることがまず問題であり、薪炭組合の証明をもらって運送すること^{しんたん}も問題だった。最初ははやる気持ちを抑えきれず自らノコギリを持ってやってみたが、まるで歯が立たなかった。私は仕方なく木こりを3人雇った。

ところが、うまいことに手間賃をやらずに彼らを使うことができた。彼らは木の枝だけもらえれば手間賃なしでやってくれると言うのだ。恐らく燃料が貴重な時代だったからだろう。手間賃より木の枝の価値が高かったのである。

木こりたちは専門家にしくい仕事をしてくれたが、私が期待していたほど急いではくれなかった。自分たちは必死で働いているのに、若い朝鮮人がのんきに座って監督しているのが癪に障ったのである。勘の鋭い私が見逃すはずはなかった。私も上着を脱ぎ捨てて彼らと共にフウフウ言いながら作業をしたので、ようやく彼らも私の指示に従ってくれるようになった。事業主の現場参加の重要性という一見すれば至極当然の道理を、私はこの時悟った。

私がもう一つ経験したのは日本人も誤魔化しをするということだった。ある日、切り倒した木の束を点検していたところ、木こりたちが持っていく枝として束に縛っていたものが、とうてい枝とは言えないほど太いものだった。誰が見ても幹であることは明らかだった。

「小泉さん！ これは枝だって言うけど、どうしてこんなに太いんですか」

「ああ、今回の木がすごい大木だったからですよ」

「それでも、これは枝とは言えないでしょ」

「……」

木こりたちは私の異議申し立てにぐうの音も出なかった。そして、次の日から枝の束にあった太い丸太は消えていた。目の行き届かないところでごまかして利益を得ようとするのは日本人も同じなのだろうか。

木は切ったが、さらに大きな問題は運搬だった。当時、許可証を得るためには薪炭組合に100束の木を寄贈しなければならず、その後でようやく600束の運送許可を得ることができた。

許可申請書には運送目的や理由などを記入しなければならなかった。私は薪炭組合長を訪ねて助けを求めた。当時は朝鮮人講習所¹⁹⁾が建設されていた頃だったから、私は朝鮮人として、また学生としての困難な境遇を説明し、川崎に講習所を建てるのに木が必要なので助けてほしいと訴えたのである。組合長は同胞のために教育を行おうという私に感心したのか、深く同情してくれた。そして、10束だけの寄贈で許可証を出してくれた。

「この木は日本農林省の薪炭であることを証明する」

この許可証で600束を運送できたが、その1回の運送では大したお金にならなかった。検問所を通過する時、この証明書を出して通過許可の印を押されれば、この証明書はもう使えなくなる。

そこで、私は検問所の役人がウトウトしている午前2～3時を狙うことにした。通過する時に印を押されさえないければ、この証明書を継続して使うことができるからである。そしてあらかじめ薪炭組合長にお願いし、証明書に運送日を記入せずにおいた。日にちを記入したらその日に運送しなければ無効になるため、日にちを指定せずに発行してほしいと頼んだのである。そのようにして、私は一度だけもらった許可証でずっと木を運送することができた。私は川崎講習所に50束、茅ヶ崎講習所に50束を寄贈してからは、木を売る商売に本格的に取り組んだ。

木は川崎の桜本で飛ぶように売れた。朝鮮焼酎を作るためには質の良い木が必要で、それに西運寺から運送した木が適していたのである。当初1束あたり6円だった木は、燃料が

19) 訳注：「国語講習所」のことか。「国語講習所」は戦後在日韓国・朝鮮人が自主的に建設した朝鮮語による民族教育を行うための施設。

非常に貴重だったこともあって木を買いだいたいという人たちが列をなすほどだったため、すぐに30円に値上がりした。特に焼酎造りに適していたためか、35円、40円と木の値段は上がり続け、しまいには60円でも木が不足して売れなくなるほどだった。私のもとにはにわかには大金がたまりはじめた。

「なるほど、商売というのはこうやればいいのか」

私は自分に商才があるということ、その時はっきりと悟った。同時に、お金の流れが見える感覚があり、そのお金を手中に入れる方法もぼんやりとだわかってきたような気がした。それが1948年から49年頃のことだったと思う。

そのようなある日、たしか2月1日のことだったと思う。ラジオでニュースを聞いていたところ、^{へきれき}青天の霹靂のような知らせが飛び込んできた。通貨改革²⁰⁾が行われるというのだ。

「あちゃあ、俺も終わりだ。どうりで金が簡単に入る思ったよ……」

通貨改革が行われれば旧紙幣は紙くず同然になってしまう。1人あたり一定額を新紙幣に交換してくれるというが、そんなものはそれこそ雀の涙である。私が稼いだお金の大部分は紙くずになってしまうのだ。

「キム・デヨン、しっかりしろ。このままへたり込むわけにはいかないだろ。『すべて求める者は得、門をたたく者はあけてもらえる』²¹⁾。できることを全部やってみよう。窮すれば通ずと言うが、何か方法があるはずだ」。

私は祈るような気持ちで様々な思案をめぐらせた。もっと大きな困難をすでに何度も突破してきたのだから、あきらめるわけにはいかない。その時、私はふと一つのアイデアを思いついた。

日本で通貨改革が行われていた頃、解放を迎えた朝鮮ではアメリカ軍政期を経て大韓民国として新政府が発足していた。日本当局は、韓国に帰国する人々へ貨幣交換の優先権を与えていた。私はそこを狙った。

20) 訳注：1946年2月16日に行われた新円切替を指す。

21) 訳注：『マタイによる福音書』第7章の一節。

私は鉄道庁と交渉し、韓国帰国者の引率者として帰還証明をもらう作業に着手した。それから故国へ帰る同胞一人ひとりの名前、必要であれば息子や嫁の名前まで借りて新貨幣と交換した。どのみち帰国者たちが一人ひとり所持している旧紙幣はいくらもなく、しかも旧紙幣であれ新紙幣であれ帰国費用以上は韓国に持ち帰ることができなかった。なぜなら、当時米軍司令部は在日僑胞の場合、帰国時に1000円以上搬入することを厳格に禁止していたからだ。このような方法で、私は木を売って稼いだお金の大部分を新紙幣に交換することができた。どうも商売運が開けてきたようだった。

日本人社会で生き残るために

横須賀中学校時代から中央大学時代に至るまで、私は多くの日本人に出会った。そのような出合いを重ねる中で、彼らがどのような人たちなのか分かってきた。だが一方で、韓国人とは違う日本人特有のよく分からない部分もあった。どの民族もそうだと思うが強者の前ではひととき弱いこと、一度約束すれば徹底的に守ること、表では笑っていても裏では悪口を言うような二面性を持っていること、残酷でありながら同情心もあること、自信のない朝鮮人を蔑視することなどがそれである。私は直接彼らとぶつかり合う中で、日本において日本人の間で事業家として成長するために必要な処世術を身につけていった。

ある夜のこと、電車に乗って東京の新橋しんばし駅から小田原おだわらまで行く途中、知り合いのユン・ジュテクという人が日本人の友人らと電車に乗り込んできた。彼は私にとって大学の先輩にあたり、キョンサンナム ド ヒョンアン慶尚南道玄風の出身だった。

彼らは仕事終わりでお酒を飲んできたのか、ほろ酔い機嫌の声音で私の席まで聞こえるほど大きな声で話していた。私に気づいていなかったユン君も彼らとよく話し、肩も組んだりするなど非常に親しい様子だった。そのうち、ユン君はおおふな大船駅であいさつをして降りて行った。ところがその後、信じられないことが起こった。

ユン君が降りて行った後、電車に残っていた日本人の友人たちが一斉にユン君の悪口を言い始めたのだ。「やはり朝鮮人は駄目だ」とか何とか……。

最初から彼らの様子を逐一観察していた。私の心に、抑えることのできない怒りが込みあがってきた。私は悪口を言いまくっていた男に近づき、横っ面をひっぱたいてから怒鳴った。

「おい、お前。それがお前ら日本人の民族性か。水原（ユン君の通名）は俺の友達だ。これ以上は聞き捨てならねえ」。

彼らは朝鮮人がペコペコすればするほど見下してくることを、私はよく知っていた。

「ちょっと前まで口づけでもしそうなほど仲が良さそうだったのに、いなくなったらすぐ悪口か」

彼らは私の突然の登場に驚いたのか、誰も口答えしなかった。

「そうやって陰で悪口ばかり言ってるのか。日本人ってのはもともとそんなに卑怯ひきょうなのか」

私の態度が頑強だったからか、それとも他の乗客に聞こえたら自分たちが恥ずかしいと感じるほど私の言葉が正しかったからかは分からないが、彼ら3人は口答えも抵抗もせず、すぐに「自分たちが間違っていた」と謝り始めた。そして最後には「水原には秘密にしてくれ」と頼み込んできた。

私は突然態度が変わった彼らが憎らしくもあったが、一方で横っ面をひっぱたいたのはちょっとやり過ぎだったのではないかと申し訳ない気もした。私は彼らと一緒に電車を降り、近くの屋台に連れて行ってお酒をおごってやった。

「さっきは悪いことをしました。俺も血気盛んなもんだから我慢できずに失礼なことをしました。分かってください」

すると、私にひっぱたかれた男が言った。

「そんなことはありません。本当に僕らが間違っていました。水原とは本当に仲がいいんですが、つい……」

「俺たち朝鮮人は日本に来てすごく苦労したんです。俺たちも来たくて来たわけじゃない。朝

鮮人だという理由で差別され、特高警察にはしょっちゅう連行される。徴用や徴兵がどんなものだったか知っていますか。日本に来て青春時代を送り、家に帰ろうと思っても帰る場所もない。だからと言って日本で食べていくのも簡単じゃないんです。それなのにあなた方のような商売人にまで差別されたら、俺たちはどうすればいいんですか」

私がお酒を注ぎながら愚痴るように朝鮮人の厳しい状況を語ると、彼らは心から自分たちの行動を反省したようだった。私も心から彼らの謝罪を受け入れた。必要以上に出しゃばって他人のことにあれこれ口出しする私を憎たらしく思いそうなものを、怒ることもなく承服する態度がはっきりと見えたからだ。

後で分かったことだが、私にひっぱたかれた男は小田原で缶詰工場を経営している人の息子だった。彼はその日の出来事を私がミズハラに言わなかったことを知って朝鮮人に対する認識が変わり、後日私を助けてくれることになる。私が事業を始める時、事業権利や土地などの利用において彼の名前を貸してくれ、登記する時には当然のように私の名義に変えてくれたのである。

中学校時代や専門学校時代から気づいていたことだが、日本人社会で生き残るためには彼らの何倍も努力しなければならない。同じ目標を達成するために、彼らが100の努力をすれば、私たちは200、300の努力をしても目標を達成できるとは限らない。特に彼らに一度なめられれば、それは失敗したと見なければならぬだろう。

私が平塚近郊で喫茶店を営んでいた当時、喫茶店事業は有望な業種だった。立地もよく設備もAクラスのものを取り揃えたおかげで商売は順調だったが、問題は従業員たちの態度だった。店長である私が25歳の若い朝鮮人だったからか、私の指示をなかなか聞こうとしないのだ。私はすぐに問題の原因を突き止めた。当時、仕事のできる男性の料理長を職業紹介所で見つけて雇ったのだが、彼は私よりも年上で、しかも私が朝鮮人だからか横柄な態度を取っており、それが他の従業員に影響していたのである。

ある日私が店に出ると、彼は仕事もせずに自分の好きなボクシングの練習をしていた。鏡を見ながらいわゆるシャドーボクシングを熱心にやっていた。勤務時間にそのような態度を許して

いては、社長としての権威が立ちゆかない。

「おい、ちょっとこっちに來い！」

私は怒りのこもった声音で彼を呼びつけた。

「勤務時間に何やってんだ？ お前、そんなにボクシングがやりたいのか」

彼はいつもと違う私の態度に驚いたのか、一言も言い返さなかった。

「ボクシングってのはそんな風に鏡に向かってやるもんじゃねえ」と言いながら、私は彼の顔に向かって拳を放った。彼はその1発で音を立てて床に倒れた。

私はその料理長にその日までの給料をやり、すぐに解雇した。それから、彼を紹介した職業紹介所へ行って苦情を言った。不誠実な人物を紹介されて商売に大きな損害が出たから賠償しろ、という主旨の話を興奮した口調で一氣にまくし立てた。紹介所の職員も驚いていた。そんな風に興奮してやって来る人はいなかったのだろう。

ともあれ、それからその紹介所では私のところに人材を送る際には特に気を遣うようになり、さらに「社長が並々ならぬ人だからしっかり勤務しろ」と注意する念の入れようだった。最初は見下していても、相手をきちんと認めてからは責任感を持って対応する日本人の一面が垣間見えた事件だった。

解放直前のことだ。

当時、私は横浜専門学校に通っていたのだが、ある日川戸という特高警察が抜き打ちで私の下宿を訪れ、不穏な書籍がないか搜索したことがあった。しかし、どれだけ探しても思想的に問題となるようなものがあるはずはなかった。川戸はそれでもあきらめず隅々まで搜索し、あげくの果てに聖書を持ち出して言いがかりをつけてきた。

「お前、キリスト教の信者か」

「はい、そうです。小さい頃からカトリックの家庭で育ったもので」

「よし、じゃあ一つ聞こう。イエスとは誰か」

「イエスは創造主である神の唯一の子であられ、我々人間の原罪を代わりにあがなうため、十字架に打ちつけられてお亡くなりになったお方です」

「ほう、おもしろい。では、創造主は神でイエスは神の子だというのだな。では、お前は神を

信じて崇拝しているというわけだ？」

「はい」

川戸は明らかに言いがかりをつけてきていた。大日本帝国が敗亡する直前、最後の悪あがきをしていたその頃は、すでに宗教の自由もなく、人権も犬や豚と同じように扱われていた。日本軍国主義の下っ端に過ぎない川戸という人間が社会主義や共産党活動を調査しにやっしつて来て、なぜ関係のないキリスト教について執拗しつに聞いてきたのか。それは当時彼らが敵国だったアメリカやイギリスなど連合国の国々を鬼畜と呼んで憎悪しており、キリスト教が彼らの宗教だと認識されていたからである。「天皇陛下」を神格化していた彼らとしては、言いがかりをつけるのに格好の材料だった。

私の予感わなは的中した。川戸は陰険な微笑みを浮かべながら私に罠を仕掛けてきた。彼の気味の悪い笑みから、獲物を手にしたという満足感がうかがえた。

「では、お前は天皇陛下とイエスのどちらが尊いと考えておるか」

私はその瞬間「やられた」と思った。私が答えられずにいると、川戸は急ぎ立ててきた。少し戸惑っていた私は、それでも機知を発揮して答えた。

「天皇陛下は大日本帝国の臣民が崇め敬うお方であり、イエス・キリストは宗教的な見地から全世界のキリスト教信者が神の子として人類の罪をあがないお亡くなりになった救世主と崇めるお方です」

私はドキドキしながらも罠から逃れようと自分なりに試みたが、それを聞いていた川戸の目つきが陰しくなったのを見て失敗したことに気づいた。

「馬鹿野郎。この朝鮮人が」

その日、私は川戸によって連行され、文字通り半殺しの目にあつた。全身血まみれになり、ほとんど気絶した状態で家に帰った。

この事件の2カ月後、日本は敗戦した。当時、解放された朝鮮はもちろんそうだっただろうが、日本もマッカーサー司令部の発足によって社会の雰囲気激変した。日本人はすっかり意気消沈し、なかでも軍国主義の手先だった軍人や警察官は必死で身を隠すほどだった。私たち朝鮮人は一変した状況に適應するため、朝鮮人保護対策委員会を設立し、それはさらに朝鮮人連盟に改編された。私はそこで保安隊長を務めていたのだが、ちょうどその頃、道端で偶然にも特高警察の川戸に出くわした。

人生どうなるかわからない。万事は巡りめぐるものだという言葉もあったか。私は2カ月前の悪夢のような事件をまざまざと思い出しながら、川戸を朝鮮人連盟へ引っぱっていった。その頃は人の一人や二人殺すことなど問題にならないほど混乱した時代だった。私は彼を連れて行って思う存分仕返しをするつもりだった。しかし連盟に入ると、状況は予想外の展開を見せた。

その頃は終戦直後だったため、朝鮮人は死ぬほどの苦勞をして九死に一生を得たという気持ちを抱いていた。そのため、日本人、なかでも警察官の前では特に殺気立っていた。連盟カンジュにいた光州出身者たちが光州学生事件²²⁾に関して川戸を厳しく追及しはじめた。もちろん、川戸が光州学生運動と関係があるはずもなかったが、特高警察出身だったため殺伐とした雰囲気を避けることはできなかった。そのうち、その雰囲気はさらにエスカレートし、しまいには川戸の命が危ぶまれる状況になった。

その状況は私の意図とはかけ離れたものだった。私はもともと仕返しをしようとは思っていたが、殺そうというつもりは全然なかったのである。しかし、事態は私がコントロールできない状態まで発展していた。放っておいたら川戸は死ぬ。私はこのまま彼を殺すわけにはいかないと考え、便所に連れて行くふりをして逃がしてやった。

このようにして、悪徳警察官だった川戸は命拾いをした。たぶん私がいなければ、彼は絶対に死んでいただろう。川戸も私を命の恩人だと慕い、その後は朝鮮人に対する態度が180度変わった。私から見ても、彼は確かに反省していた。過去のあくどい行動を許したわけではな

22) 1929年 11月、朝鮮の全羅南道光州で起った反日学生運動。「光州学生運動」とも。

かったが「自分も上部の命令に従っていたままで、これからは二度と警察官の仕事はしない」という彼の言葉を信じてみることにした。

この事があってから、朝鮮人連盟における私の立場は非常に困難なものとなった。保安隊長という肩書きを持つ者が悪徳警察官を助けてやったという理由で、私に対する連盟幹部の態度がとてつもなく殺伐としたものとなったのである。私はまるで反逆者のように扱われ、しばらくの間はかなり辛い状況に置かれた。しかし、私は当時の私の行動がまちがっていたとは思わない。罪を憎んで人を憎まずという言葉もあるが、神に仕えるカトリック信者として殺人を見過ごすことはできなかったのである。

そのようなある日、川戸が約束を破って茅ヶ崎警察署に外国人担当として赴任してきた。彼が赴任のあいさつをしに来たことで、私はその事を知った。彼が私のもとを訪れたのは、妻子と生活していくために仕方なく警察に復帰した事情を述べ、私に了解を求めるためだった。私も生活が苦しい時代状況をよくわかっていたから、彼の決定にそれ以上異議を唱えなかった。

その後、川戸は朝鮮人の事なら全力で手助けしてくれた。当時、生活苦から日本に来る朝鮮人が多く、その大半は日本で生活した後で帰国した人々だったのだが、日本当局の監視が非常に厳しく、ほとんどが密航者だった彼らはあちらこちらに隠れ住んでいた。見つければ収容所に監禁されるからだった。まさにこのような状況において、川戸は困っている朝鮮人をあれこれと助けてくれたのである。

川戸。彼は私を含む多くの朝鮮人を苦しめた悪徳警察官であり、彼の罪は単純に上部の命令だったという弁明だけで免れることができないほど深い。しかし同時に、彼は短い混乱期の後で、再び権力をふるう警察官として過去のあくどい仕事に戻ることもできたのだ。それにもかかわらず、彼はその道を選ぶ代わりに、困っている朝鮮人をできるかぎり助ける道を選んだ。自分の過去に対する彼の反省は本物だったと信じていいだろう。私は彼の姿を通じ、日本人の別の一面、いわば正直さや一貫性といったものを認めた。

日本人の間で彼らと競争しながら生きていくのがどれだけ大変かということは、経験した者で

なければわからない。どの民族であれ、外国人としての生活が大変なことは同じであろう。民族間の対立や敵対心といった問題は韓国と日本だけの問題ではない。イギリス人とアイルランド人、イングランド人とスコットランド人、フランス人とドイツ人、ポーランド人とロシア人など、地球上に我々とよく似た事例はたくさんある。

しかし、日本における韓国人の人生には、明らかに違う種類の困難があった。彼らは我々を見下し、我々は我々で歴史的、文化的な優越感を抱いていた。彼らに対する嫌悪感もあった。我々の問題も大きかったが、いずれにせよ彼らは我々を侵略して奴隷のように働かせた。我々は好きで祖国を捨てて日本に来たわけではない。そうしなければならぬ状況を作り出したのは彼らだったのである。

彼らが無理に引き起こした戦争に徴兵された朝鮮の若者が、アジア各地でどれほど死んだことだろう。また、各地の軍需物資工場に徴用され、きちんと給料ももらえないまま病死したり障がい者となった人、廃人の身で帰国した朝鮮人の運命をどうしてくれるのか。若い身空で慰安婦として連れていかれた朝鮮の娘たちのことを思うと、悔しくて身震いがするほどだ。

いわゆる「徴用報国隊」²³⁾という美名のもと、朝鮮から強制的に連れてこられた同胞の運命を、私は直接この目ではっきりと見た。そのなかでも、川崎製鉄所で家畜以下の扱いを受けながら死んでいった人々の話は、口にするのもおぞましいほどである。彼らの生活はもはや人間の生活とはかけ離れたものだった。死にかけの状態で何とか命をつなぐ程度の食料をもらいながら、狂った戦争の消耗品として利用され、死んでしまうか廃人の身で帰国船に乗って帰っていった彼らの運命を、私はありありと覚えている。

彼らの多くが、廃墟となった故国で生活していくすべを持たなかった。帰国しても畑ひとつない状況だったので、再び日本に帰ってくるしかなかったのである。何も持たずに小さな船で海を渡ろうとして溺れ死ぬ人も多く、海を渡ってもほとんどは密入国が発覚して大村収容所に入れら

23) 訳注：「勤労報国隊」のことか。「勤労報国隊」は1941年12月1日に施行された制度。学校・職場ごとに、14歳以上40歳未満の男子と14歳以上25歳未満の独身女性によって編成され、軍需工場、鉱山、農家などにおける無償労働に動員された。

れた。

大村収容所はどのような状況だったか。

収容所に入れられると、畜生を数えるように「1匹」「2匹」「3匹」と数えられ、男は「オス」、女は「メス」と呼ばれたというのだから、どのような状況だったか多くを語る必要はないだろう。ここでも多くの人々が命を落とした。戦後の暗い時代、マッカーサー司令部が統治していた日本における彼らのような朝鮮人の運命を、日本当局はもちろん大韓民国もまったく思いやってはくれなかった。

このような状況で、日本に残ってお金を稼がなければならないのか。それとも不透明な未来をかえりみず故国へ、そして家族のもとへ帰るべきなのか。休学中の大学はどうしよう。

決心がつかないでいたその頃、私はテレビのニュースで朝鮮戦争が勃発ぼっぱつしたことを知り、驚いて口がふさがらなかった。目の前が真っ暗になったような気がした。北朝鮮軍が波のように押し寄せ、私の故郷・倭館の橋が爆破されたというニュースも報道された。その時の不安な気持ちや戸惑いは、言葉ではとうてい表現することができない。早く復学して大学を卒業し、貯金をためて帰国しようという私の計画が泡と消えた瞬間だった。

幼い頃に聞いた朝鮮のことわざを思い出した。

「虎に連れ去られても、気を強く持てば生き残れる」。

「そうだ。まず大学を卒業しよう。一つひとつ解決していくんだ。キム・デヨン、お前は今までよくやってきたじゃないか。とりあえず計画どおりお金を稼ごう。資本主義の世の中だろう？ それから世の中をよく見渡そう。戦争がなかったとしても、早く帰国して何かすることがあるわけじゃない。父なる神よ、今まで見守っていただき感謝いたします。この暗澹あんたんとした時代にリノの魂をお守りください。リノに希望と勇気をお授けください。そして、この暗闇を抜けられるようお導きください。リノに慈悲をお恵みくださり、挫折せずに精進できるようお助けください」。

朝鮮戦争が最終盤に差しかかっていた1952年、私はついに中央大学法学部を卒業した。

休学と復学を繰り返し、アルバイトや実業をしながら、本当に必死でなすとげた卒業だった。これ以上の精神的彷徨^{ほうこう}はありえなかった。目標はより明確になり、いくつかの商売経験を通じて自信もついていた。また、当時としてはかなり大きなお金もたまっていた。

「ここからが本格的な出発だ。目を大きく開けて遠くを見よう。小さな商売をしても何にもならない。もっと大きな目標を持とう。本当の事業を起こしてみようじゃないか」

世の中を甘く見ていたわけではないが、私にはそれが太刀打ちできないものとは思えなかった。

日本語抄録

本稿はキム・デヨン氏の自伝『朝鮮人 金大榮』を翻訳したものだ。

本稿では原書のうち「はじめに」「西洋世界との出会い」「文明の夜明け」「寒村少年の夢」「身ひとつで玄界灘を渡る」「横須賀の朝鮮少年」「本格的な留學生活」「朝鮮人としての學生時代」「裁判官か金か」「事業家としての芽生え」を翻訳した。

「はじめに」では筆者がこの本を書いた目的を説明し、在日コリアンの立場から見た韓国社会について韓国の読者に伝えたいという点を強調している。

「西洋世界との出会い」「文明の夜明け」では、著者が故郷で過ごした幼少期を扱っている。特に著者の行動様式の基礎となったキリスト教信仰について詳しくつづられている。

「寒村少年の夢」では、著者が初めて故郷を離れ、満州にある朝鮮人村で小学校教師として過ごした期間が描かれる。

「身ひとつで玄界灘を渡る」は、著者がどのような方法で日本に密航したかを語る冒険談だ。60年前の事にもかかわらず生き生きと再現されており、著者の記憶力に驚かされる。

「横須賀の朝鮮少年」「本格的な留學生活」「朝鮮人としての學生時代」「裁判官か金か」「事業家としての芽生え」では、著者が日本での生活に適応し、実業家として成長していく姿が描かれる。在日コリアン社会を理解するうえで最も重要な部分だと思う。